

夢を信じて
2020年11月

あなたが子どもの頃に抱いた夢は？ アスリートが子どもの頃に見ていた夢、そして夢を持つことの大切さを語る「夢を信じて」。インタビュアーはコラムニストのえのきどいちろうさん。今回のインタビューゲストは、元サッカー日本代表選手で、現在は横浜F・マリノスのアンバサダーとして活躍する波戸康広さんです。

第11回

横浜F・マリノス アンバサダー
はと やすひろ
波戸 康広さん

マラドーナの5人抜きを見て、プロになりたいと思ったんですよ。

— いつからサッカーを？

波戸 本格的にサッカーを始めたのは小学3年生くらいからでしたね。コーチが電気屋さんのおじさんで、ワールドカップの得点シーンのビデオを作ってくれたんです。マラドーナの5人抜きを見て、この選手はプロのサッカー選手だって聞いて、プロになりたいと思ったんですよ。海外に行けばプロサッカー選手になれるだろうって思ったんですよ。

— すごいなあ。まだ日本にはプロがない頃に。

波戸 夢っていうのは持った瞬間に目標が変わっていった、まず淡路島選抜の上って何だろうって考えたら兵庫選抜だったんですよ。一つ目の目標は兵庫県選抜。その上が関西選抜。

— 淡路島にいた子の地図が広がってく感じですよな。滝川第二高校には？

波戸 「行きたい学校に行け。お父さん、お母さんも一生懸命頑張るから、お前も一生懸命頑張れ」って親父に言われて行きました。そこでゲルト・エンゲルスに出会って横浜フリューゲルスに。

— やっぱりそうやって人と出会わないと道って開けないですね。

波戸 でも、そのエンゲルスさんに「フォワードとしてのセンスがない」って言われたんですよ(笑)

— 波戸さんは戦術的なサッカーに関与した最初のサイドバックだったと思います。

波戸 小・中・高からプロでもフォワードだった人間が、ディフェンスに転向して日本代表まで行ったというのは数少ないと思いますね。

— 自分がひと仕事しないとおさまらない感じ、エネルギーに満ちた感じっていうのを波戸さんはすごく持っていた印象がありますね。日本のサッカー史の中でもすごく攻撃のセンスがあった。

2枚看板から僕は全部吸収したんです。

波戸 フリューゲルスが最後に天皇杯で優勝して、僕自身も最後の最後まで試合に出させてもらって、その優勝でマリノスからオファーももらったんです。日本代表に近づくことを考えて、マリノスに入りました。

— Jリーグのボックスで当時のマリノスの4人は特別な感じがしますね。松田がいて、中澤がいて、ドットラがいて、波戸さんがいるっていう。



波戸 今のマリノスもそうですけど、そんなに組織では守ってないんですよ。みんなそれぞれ個の力で守ってるんですよ。伝統ですね。入団した頃、最終ラインには井原さん、小村さんがいて。練習が終わると週に2日も3日も井原さんちでご飯を食べて、あとの2日間は小村さんちでご飯食べて。ご飯食べながら「ああいう時どうしたらいいんですか？」って聞く。その2枚看板から僕は全部吸収したんです。井原さんはバランスとフィード。小村さんは対人の強さ。自分の長所はスピード。スピード活かしたディフェンダーってマリノスにいないなあ、代表見渡してもいないなあ…と思って自分のプレイ像を作り上げていったんですよ。ダメな所を改善するより、いいところを伸ばそうと思えば短所も長所も全体が同じようにならなくていいんですよ。

— なるほど。

波戸 僕、将棋もやってて、将棋は向こうのラストスリーラインに行ったら「成れる」じゃないですか、パワーアップするんですよ。僕は飛車で向こうまで行ったら「龍」になるんですよ。そういうところで僕は個を出そうと。そういうファイティングポーズの部分をトルシエに見い出してもらったと思いますね。初めて代表戦はスペイン戦。フランスに5-0で負けた次の試合でしたし、自分が先発で出るとは思ってい

ませんでした。スペインから実家に電話したとき「正直怖い」「自信ないんだよ」みたいな言葉を親父に言ったら「プロになってそんなこと思ってるんじゃない、もうやめた方がいい。すぐ日本帰ってきてサッカーやめろ」って言われて。グラウディオラ、ラウル、横で入場してくる時とかも「テレビで見た顔だ！」なんて感じだったんですけど、親父の言葉でいつもの自分に戻ったんですよ。試合の一番はじめ、バルセロナのセルジっていう左サイドバックに僕、仕掛けたんです。足引掛かれてファウルになったんですけど、その時「行ける」と思いました。試合は負けましたけれど、そこからまた高い意識を持ってました。

— サンドニでやられて代表大丈夫かっていう空気の中で、気持ちを立て直して向かっていく波戸さんはすごいと思いますよ。

ワールドカップに落ちた経験がなかったら、もっと早く引退していたかもしれないですね。

波戸 親父にはワールドカップ落ちた時も「ラジオで聞いたらよ」「残念やったけど、トルシエさんに感謝せなあかん」「これだけ国際舞台でいろいろ経験させてもらって、成長もさせてもらって、それは絶対感謝せなあかん。今は落ちたかもわからないけどさっからもう一回自分がどうしたら上手になれるのかとか考える、その機会を与えてくれたんだから」って言われて。その時すぐ妻に「子どもが小学1年生なるまで、俺絶対やるから」って言ったんですよ。しかもJ2じゃなくてJ1の舞台でやるって言って。そして35歳、横浜で、F・マリノスで、引退しました。あの時のことがなかったらもっと早くやめていたかもしれないですよ。

— 横浜って波戸さんにとってすごく運命的な街だと思うんです。フリューゲルスがあって、マリノスがあって。波戸さんの引退試合ではかつてのフリューゲルスとマリノスの両方のファンがひとつになる横浜ダービーが再現されました。

波戸 高校時代に選手権で負けたのも三ツ沢、プロでデビューしたのも三ツ沢。その三ツ沢にもう一度フリューゲルスとマリノスの当時のメンバーが集まった。最高の終わり方をしましたね。当時キャプテンだった山口素弘さんが引退試合終わった後に泣いてたんですよ。「お前のおかげでこのメンバーが集まってよかった」って。僕の引退試合っていうよりも、当時のみんなの想いがつまった試合だったんでしょね。

PROFILE プロフィール

波戸 康広(はと やすひろ)さん

元プロサッカー選手。1976年5月4日生まれ。兵庫県出身。兵庫県・滝川第二高等学校から横浜フリューゲルスに入団。加入時フォワードだったポジションを右サイドにコンバート後、レギュラーに定着。1999年、横浜F・マリノスへ移籍。2001年4月、スペイン戦で日本代表デビュー。その後、柏レイソル、大宮アルディージャを経て、2010年に横浜F・マリノスに復帰。2011年のシーズン終了後、現役引退。現在は、アンバサダーとして横浜F・マリノスを支える。

取材を終えて

波戸康広さんは兵庫県三原郡西淡町(現南あわじ市)の出身だけど、すごく「横浜の男」って感じがしますね。スターの明るさと人づきあいを重んじるハートの部分を両方持っている。普段、メディアに登場するとき、関西弁の印象ってあんまりないでしょう。関西イントネーションにするときは意図的に切り替えておられる。取材中はあまりに話が面白くて引き込まれました。

横浜フリューゲルスと横浜F・マリノス。波戸さんのキャリアを形づくった2つのクラブは、ともにJリーグの「宝石」です。その輝きはサッカー史に刻まれ、また街の歴史となって現在まで続いている。波戸さんはその歴史を構成する重要な個性です。

今回、うかがった秘話ですけど、フリューゲルス解散時、波戸さんは別の強豪クラブへ移籍する目があったそうです。もしマリノスがオファーを出さなかったら…、たぶん歴史は変わってしまっただろうな。



今回のインタビューをテーマにしたコラムが横浜スポーツ情報サイト「ハマスポ」でご覧いただけます。併せてご覧ください。

えのきどいちろうの横浜スポーツウォッチング vol.49「波乱万丈」 URL <https://www.hamaspo.com/enokido/vol-49>